

## 継体天皇 三嶋藍野陵倒木復旧個所の立会調査

平成 30 年 9 月 4 日、非常に強い勢力を保ったまま徳島県に上陸した台風 21 号は、瀬戸内海を抜け兵庫県に再上陸し、近畿地方のほぼ中央を縦断して若狭湾へと抜けていった。台風 21 号に伴う暴風と高潮により、進路上となった四国地方、近畿地方が甚大な被害を被ったほか、遠く関東地方や東北地方にまで強風による被害が及んだ。近畿地方に所在する陵墓各所においても、樹木の転倒・傾倒・折損や建物・工作物の損壊などの各種の被害が発生した。近畿地方所在の四監区事務所から被害状況の報告を受けた陵墓調査室においては、まずは、墳塋上やその至近、あるいは埋蔵文化財包蔵地となっているなど、地下に遺構・遺物の存在する可能性が高い区域において発生した転倒木の根起き箇所の現状確認をすることとし、平成 30 年度末までに各員が分担して現地へ赴いた。その際に遺構や遺物を確認した場所については、倒木を処理する復旧工事が実施される前に、順次、遺物の回収や遺構の確認、位置の記録などおこなう調査を実施していくこととなった。

大阪府茨木市太田 3 丁目に所在する継体天皇三嶋藍野陵の本地についても、墳塋内にて多数の樹木の転倒・傾倒・折損が生じており、調査室員による現地確認を平成 31 年 1 月 30 日に実施した。その際、転倒や傾倒によって生じていた 29 箇所の根起きのうち、2 箇所において埴輪が出土していることを確認した(第 4 図 A・B)。本項では、この 2 箇所について報告するとともに、併せて平成 29 年台風 21 号による転倒木根起き箇所(同図 C)について報告する。

平成 30 年台風 21 号による根起き箇所に対する調査は令和元年 3 月 23～25 日におこなった。調査は、根起き箇所の位置を陵墓地形図上にプロットするための測量をおこなった後、埴輪の回収にあたった。また、埴輪は、露出していたものだけでなく、根と共に持ち上げられている土を可能な限りたたき落とし、そこに含まれていたものはできるだけ回収するよう努めた。

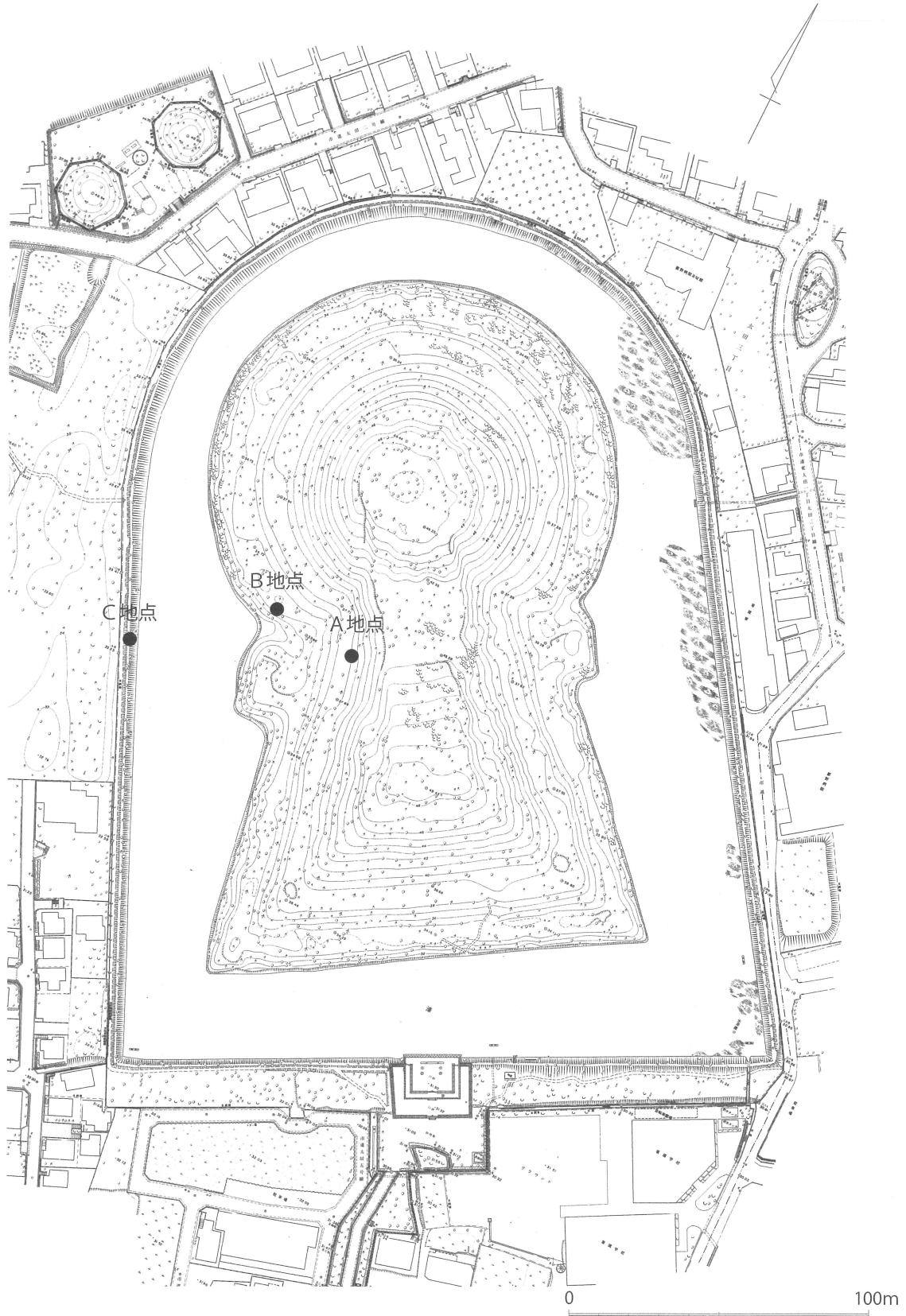
**A 地点**(図版 7-1・2) 第 4 図では第 2 段目平坦面に位置しているように見えるが、実際には第 3 段目斜面上に位置している。A 地点で回収した埴輪は 21 点であるが、この位置に埴輪列が存在する可能性はほとんどないと考えられることから、墳頂部平坦面に並べられていた埴輪の破片が転落したもの、あるいは、後世における墳丘の改変時に埴輪片を含んだ土が動かされてきた結果によるものと思われる。

**B 地点**(図版 7-3・4) 後円部 1 段目の平坦面縁辺に位置し、当地点で回収した埴輪は 22 点である。墳丘の第 1 段目平坦面に埴輪列が存在していることは既に確認されており<sup>(1)</sup>、当地点も至近に埴輪列が存在しているものと思われる。根起き箇所の周囲を掘り広げた訳ではないため、埴輪列の位置については確認していない。

**C 地点**(図版 7-5) 周濠外堤の内縁にあたる。平成 29 年台風 21 号で転倒した樹木の復旧工事をおこなった際に、現地を管理する職員が埴輪片の存在に気づき、回収にあたったものである。回収は、平成 30 年 2 月 23 日と 3 月 19 日におこなわれた。回収した埴輪は 21 点である。この埴輪は、その出土位置から、周濠外堤内縁を巡る埴輪列に由来するものである可能性が最も高いと思われる<sup>(2)</sup>。

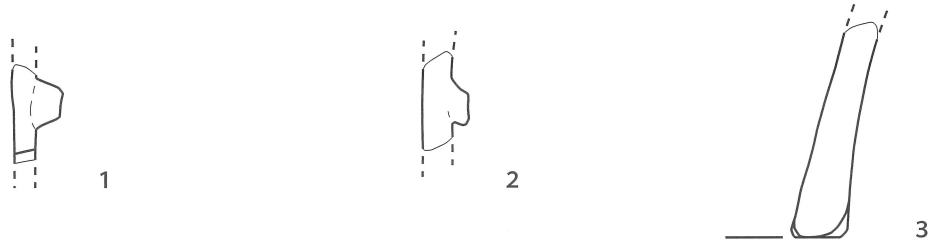
当陵本地に伴う埴輪については、昭和 61 年に実施した外堤護岸工事の事前調査<sup>(3)</sup>と平成 14 年に実施した墳塋護岸工事の事前調査<sup>(4)</sup>、また、当庁管理地外ではあるが、昭和 44 年と同 47 年に周辺の宅地開発に伴って行われた大阪府教育委員会の調査<sup>(5)</sup>、昭和 63 年に公民館建設に伴って行われた茨木市教育委員会による調査<sup>(6)</sup>などでまとまって出土している。それらの分析と、陵から北北西へおよそ 1 km のところに所在する高槻市の新池遺跡で出土した埴輪の分析から、当陵本地の埴輪は同遺跡から供給されたものであることが判明している<sup>(7)</sup>。今回出土した埴輪も、これまで知られていた当陵本地出土の埴輪の特徴の範疇を外れるものではない(第 5 図、図版 7-6～8)。

上記の大阪府教育委員会による調査、茨木市教育委員会の調査ではそれぞれ埴輪列が検出されているが、その位置から、周濠外堤の外縁側を巡る埴輪列とされている。外堤上の埴輪については、それらのほかに後



第4図 三嶋藍野陵 埴輪出土根起き箇所位置図 (1/2000)

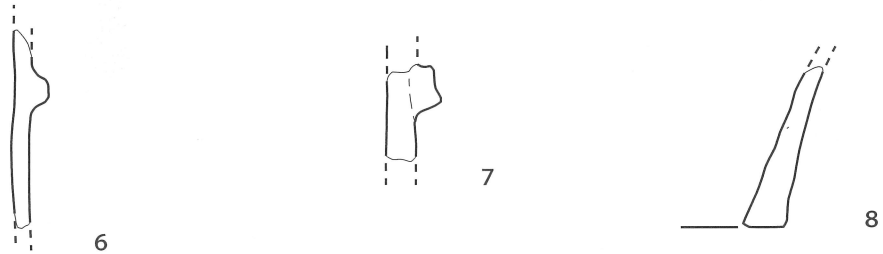
A地点出土



B地点出土



C地点出土



第5図 三嶋藍野陵 出土品実測図 (1/4)

円部北東側に形象埴輪配列区画が存在している可能性が指摘されているが、内縁を巡る埴輪列の存在については具体的な手がかりは得られていなかった。その点、C地点において埴輪を確認できた事実は重要である。今後、外堤上で掘削を伴う工事が実施される際には注意したい。(有馬 伸)

註

(1) 徳田誠志・清喜裕二・有馬 伸「継体天皇 三嶋藍野陵墳塋裾護岸その他工事区域の調査」『書陵部紀要』第55号、宮内庁書陵部、2004年。

(2) ただし、当陵の周濠外堤の内縁部分には「幕末の修陵」時に築造されたと考えられる小土堤状の高まりが巡っており、この小土堤の盛土が外部から搬入されている可能性もあるため、埴輪が外部から持ち込まれたものである可能性を完全に排除できない。

なお、昭和61年に実施された外堤護岸工事の事前調査の報告では、外堤盛土内に多数の埴輪片が含まれていたとの所見はない。

鶴澤探真「継體帝 三嶋藍野陵 荒蕪」／「継體帝 三嶋藍野陵 成功」(外池 昇編『文久山陵図』、新人物往来社、2005年)。

土生田純之「三嶋藍野陵整備工事区域の調査」『書陵部紀要』第39号、宮内庁書陵部、1988年。

- (3) 土生田純之「三嶋藍野陵整備工事区域の調査」、前掲註(2)文献。
- (4) 小浜 成「太田茶白山古墳及び陪冢出土の埴輪」奥 和之編『総持寺遺跡—古墳時代中期の小規模古墳群の調査—』(『大阪府埋蔵文化財調査報告』2004—2)、大阪府教育委員会、2005年。
- (5) 廣瀬 覚「太田茶白山古墳(継体陵)」茨木市史編さん委員会編『新修茨木市史』第7巻 史料編 考古、茨木市、2014年。
- (6) 森田克行編『新池 新池埴輪製作遺跡発掘調査報告書』(『高槻市文化財調査報告』第17冊)、高槻市教育委員会、1993年。  
田中智子「総持寺古墳群をめぐる埴輪生産と供給」奥 和之編『総持寺遺跡—古墳時代中期の小規模古墳群の調査—』、前掲註(4)文献。



1 根起き箇所 A地点 (南西から)



2 根起き箇所 A地点 埴輪出土状況 (南西から)



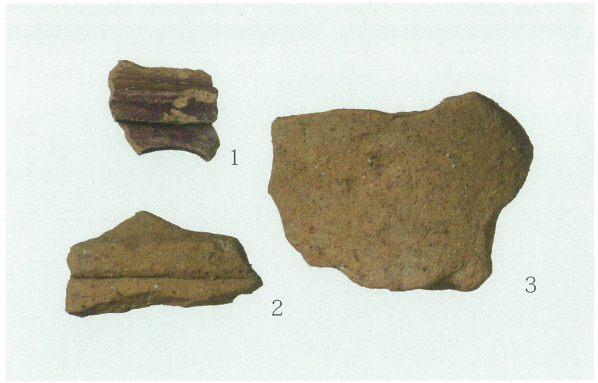
3 根起き箇所 B地点 (西から)



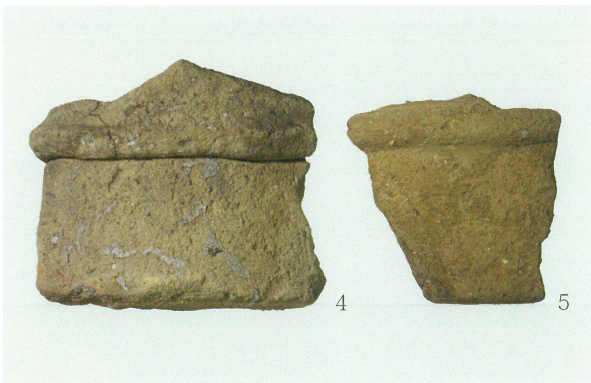
4 根起き箇所 B地点 埴輪出土状況 (西から)



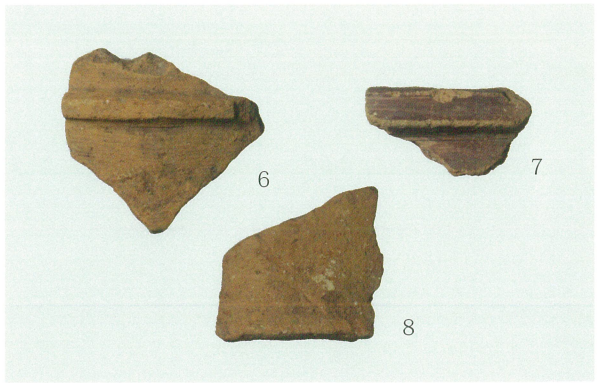
5 根起き箇所 C地点 (北から)



6 A地点出土埴輪



7 B地点出土埴輪



8 C地点出土埴輪